

資料

平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(3)

入 江 昌 明

一 はじめに

平成二十年三月、小中学校の学習指導要領が十年ぶりに改訂された。同年一月の中央教育審議会の答申によれば、今回の国語科の改訂は、「小学校、中学校及び高等学校を通じて言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることに重点を置」いて内容の改善を図ったものである。傍点を施した箇所から明らかなように、今回の改訂では「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が大きな特色の一つとなっているが、中学校の国語科において伝統的な言語文化はこれまでどのように指導されてきたのであろうか。また、今後どのように指導していけばよいのであろうか。

本稿は、そうした日本の伝統的な言語文化の指導の在り方について考察するための基礎資料として、平成以降に出版された光村図書(以下、光村と略称)の中学校国語教科書に収載された短歌教材をまとめて提示したもので、東京書籍と学校図書(二社の教科書を取り上げた前々稿(「平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(1)」『教育諸学

研究』第二四巻)、三省堂と教育出版の二社の教科書を取り上げた前稿(「平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(2)」『教育諸学研究』第二五巻)に続くものである。

二 短歌教材の掲出方法

前稿でも述べたように、現行の中学校国語教科書は五社ともに二年生で近・現代の短歌教材、三年生で古典の和歌教材を取り上げているが、短歌や掲出の仕方は出版社によって一様ではない。いったいどのような短歌がどのような形でどれくらい国語教科書に収載されているのか、本稿ではそうした短歌教材収載の実態が把握できるよう、以下に示すように前稿と全く同じ要領でその内容を示すことにした。

※ 短歌教材は、各出版社別に平成十八年度に出版された教科書から年代を遡る形で掲出した。

※ 短歌はできるだけ教科書に収載する形で掲出するようにしたが、紙幅の都合で改行するなど一部変更を加えたものもある。

※ 近・現代の短歌を取り上げた単元と古典の和歌を取り上げた単元では、収載歌数がわかるよう通し番号を付した。

※ 作者名は原則として当該の歌の前行に掲出した。

※ 作者名や短歌中の漢字や歴史的仮名遣いの部分などに施されたルビは、すべて教科書通りとした。

※ 随筆やコラム欄などに短歌が取り上げられている場合は、その旨を記して短歌だけを掲出した。

三 光村図書の短歌教材

〔平成十八年度版 国語教科書〕

『国語2』

「短歌を味わう 玉城徹」(五四頁～五九頁)に、次の三首を収載する。

○ 草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

正岡子規

○ 瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

石川啄木

○ ころよき疲れるかな
息も吐かず

仕事をしたる後のこの疲れ

右の三首以外には、五八頁に正岡子規、五九頁に石川啄木と北原白秋関係の写真などを掲出するのみで、巻末の資料編に「短歌十二首」(二二八頁～二二九頁)を収載する。

伊藤左千夫

① 九十九里の波の遠鳴り日のひかり青葉の村を一人来にけり

与謝野晶子

② 海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家

島木赤彦

③ まばらなる冬木林にかんかと響かんとする青空のいろ

長塚節

④ しめやかに雨過ぎしかば市の灯はみながら涼し枇杷うづたかし

前田夕暮

⑤ 風暗き都会の冬は来りけり帰りて牛乳のつめたきを飲む

斎藤茂吉

⑥ 死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

若山牧水

⑦ ゆふぐれの雪降るまへのあたたかさ街のはづれの群衆の往来

佐藤佐太郎

⑧ 夜更けて寂しけれども時により唄ふがごとき長き風音

宮 柊二

⑨ むらさきに葎の花はひらくなり人を思へば春はあけぼの

塚本邦雄

⑩ ずぶ濡れのラガー奔るを見おろせり未来にむけるものみな走る

栗木京子

⑪ 観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

依 万智

⑫ 「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

『国語3』

「古今和歌集 仮名序」(一一四頁～一一五頁)に、和歌の解説のよう
な形で本文並びに通釈を収載し、一一八頁に『古今和歌集』並びに『新
古今和歌集』の歌人を描いた絵を収載する。

「君待つと——万葉・古今・新古今——」(一一九頁～一二五頁)に、
以下の十七首を収載する。

「万葉集」(一一九頁～一二二頁)

① 春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

持統天皇

柿本人麻呂

② 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

山部赤人

③ 天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

布士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ

照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ

雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

「反歌

④ 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

山上憶良

⑤ 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ

額田王

平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(3)

⑥ 君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

東歌

⑦ 多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき

防人歌

⑧ 父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる

大伴家持

⑨ 新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事

「古今和歌集」(一二三頁～一二三頁)

紀貫之

⑩ 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける

藤原敏行

⑪ しら露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちちにそむらむ

小野小町

⑫ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

よみ人しらず

⑬ 飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

「新古今和歌集」(一二三頁～一二四頁)

宮内卿

⑭ 花さそふ比良の山風吹きにけりこぎ行く舟の跡みゆるまで

西行法師

⑮ 道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

藤原定家

- ⑬ 見わたせば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

式子内親王

- ⑭ 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

〔平成十四年度版 国語教科書〕

『国語2』

「短歌と俳句、それぞれの表現

高田 宏」(一〇一頁～一〇九頁)

に、短歌と俳句に関する解説があり、短歌の解説中に次の三首を収載する。

志貴皇子

- 石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも

山川登美子

- 帰り来む御魂と聞かば凍る夜の千夜も御墓の石いだかまし

橘 曙覧

- たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時

以下、俳句を解説した後に筆者の好きな短歌として次の八首を収載する。

大伴家持

- ① 春の苑紅にはふ桃の花下照る道に出で立つ少女

西行法師

- ② ねがはくは花の下にて春死なんそのきさらぎのもち月の頃

源実朝

- ③ 奥山の岩垣沼に木葉落てしづめる心人しるらめや

与謝野晶子

- ④ 清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

石川啄木

- ⑤ 秋来れば

神や住まむとかしこみて見る

若山牧水

- ⑥ うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花

前田夕暮

- ⑦ 君ねむるあはれ女の魂のなげいだされしうつくしさかな

斎藤茂吉

- ⑧ 最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも

『国語3』

「君待つと——万葉・古今・新古今——」(四〇頁～四七頁)に、以下の十六首を収載する。

「万葉集」(四〇頁～四三頁)

持統天皇

- ① 春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

柿本人麻呂

- ② 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

額田王

- ③ 君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

山上憶良

- ④ 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俵はゆ
何処より 来りしものぞ 眼交に もとな懸りて
安眠し寝さぬ

反歌

- ⑤ 銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも

山部赤人

- ⑥ 春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける
防人歌

- ⑦ 父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる

大伴家持

- ⑧ 新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事

「古今和歌集」(四四頁〜四五頁)

紀貫之

- ⑨ 人はいさ心もしらずふるさととは花ぞむかしの香ににほひける

藤原敏行

- ⑩ 秋の夜の明るくも知らず鳴く虫はわがごとものやかなしかるらむ

小野小町

- ⑪ おもひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
よみ人しらず

- ⑫ 飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(3)

「新古今和歌集」(四六頁〜四七頁)

宮内卿

- ⑬ 花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の跡みゆるまで

西行法師

- ⑭ 道のべに清水流るる柳かげしほとてこそ立ちとまりつれ

藤原定家

- ⑮ 見わたせば花ももみぢもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮

式子内親王

- ⑯ 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

〔平成九年度版 国語教科書〕

『国語2』

- 「短歌・その心 武川忠一」(五二頁〜五九頁)の「1」(五二頁〜五六頁)の解説文中に、次の六首を収載する。最後の二首は中学生の作品である。

の作品である。

正岡子規

- くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る

与謝野晶子

- 髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

窪田空穂

- 大海の底に沈みて静かにも耳澄ましある貝のあるべし

北原白秋

- 草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

○ 雨の日に色とりどりのかさひらき私の赤も今咲きにゆく

(中学生)

○ 右足に俺の魂ぶちこんでいまこそはなて逆転シュート

(中学生)

「2」(五六頁〜五七頁)に、以下の十首を収載する。

① やはらかに柳あをめる

石川啄木

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

若山牧水

② 白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

斎藤史

③ 薄紙の火はわが指をすこし灼き蝶のごとくに逃れゆきたり

斎藤茂吉

④ 彼岸に何をもとむるよひ闇の最上川のうへのひとつ螢は

木下利玄

⑤ 街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る

土屋文明

⑥ 雪とけし泉の石に遊びいでて拝む蟹をも食はむとぞする

会津八一

⑦ かすがの の みくさをり しき ふす しか の つの

さへ さやに てる つくよ かも

佐藤佐太郎

⑧ みづからの光のごとき明るさをささげて咲けりくれなるの薔薇

宮 柊二

⑨ あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり

近藤芳美

⑩ たちまちに君の姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき

『国語3』

「君待つと——万葉・古今・新古今——」(一八四頁〜一九三頁)に、以下の十七首を収載する。

「万葉集」(二八四頁〜一八七頁)

① 春過ぎて夏来たるらし白樺の衣乾したり天の香具山

持統天皇

② 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

柿本人麻呂

③ 天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

山部赤人

布士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の

影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も

い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける

語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

反歌

④ 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

山上憶良

⑤ 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ

額田王

⑥ 君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

東歌

⑦ 多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき

防人歌

⑧ 韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして

大伴家持

⑨ 新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事

「古今和歌集」(一八八頁〜一八九頁)

紀貫之

⑩ 人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香ににほひける

藤原敏行

⑪ しら露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちちにそむらむ

小野小町

⑫ 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

よみびとしらず

⑬ 飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

「新古今和歌集」(一九〇頁〜一九一頁)

宮内卿

平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(3)

⑭ 花さそふ比良の山風吹きにけりこぎ行く舟の跡見ゆるまで

西行法師

⑮ 道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ

式子内親王

⑯ 桐の葉も踏み分けがたくなりけり必ず人を待つとなけれど

藤原定家

⑰ 駒とめて袖打ちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮れ

「東くだり——「伊勢物語」から——」(一九四頁〜一九七頁)の本文

中に、次の二首が載る。

○ 唐衣きつつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

○ 名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人は在りやなしやと

〔平成五年度版 国語教科書〕

『国語2』

「短歌・その心 武川忠一」(七〇頁〜七七頁)の「1」(七〇頁〜七三頁)の解説文中に、次の五首を収載する。

依万智

○ 自転車のカゴからわんとはみ出してなにか嬉しいセロリの葉っぱ

正岡子規

○ くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降る

与謝野晶子

○ 髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

○ 大海の底に沈みて静かにも耳澄ましゐる貝のあるべし

窪田空穂

○ 草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

北原白秋

「2」（七四頁〜七五頁）に、以下の十首を収載する。

① やはらかに柳あをめる

石川啄木

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

若山牧水

② 白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

斎藤史

③ 薄紙の火はわが指をすこし灼き蝶のごとくに逃れゆきたり

斎藤茂吉

④ 彼岸に何をもとむるよひ闇の最上川のうへのひとつ蛸は

木下利玄

⑤ 街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る

土屋文明

⑥ 雪とけし泉の石に遊びいでて拝む蟹をも食はむとぞする

会津八一

⑦ かすがの の みくさをり しき ふす しか の つの

さへ さやに てる つくよ かも

佐藤佐太郎

⑧ みづからの光のごとき明るさをささげて咲けりくれなるの薔薇

宮 柊二

⑨ あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり

近藤芳美

⑩ たちまちに君の姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき

『国語3』

「君待つと——万葉・古今・新古今——」（一九〇頁〜一九八頁）に、以下の十七首を収載する。

「万葉集」（二九〇頁〜一九三頁）

① 春過ぎて夏来たるらし白樺の衣乾したり天の香具山

持統天皇

② 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

柿本人麻呂

③ 天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

山部赤人

布士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の

影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も

い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける

語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

④ 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

反歌

山上 憶良

⑤ 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ

額田王

⑥ 君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

東歌

⑦ 多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき

防人歌

⑧ 韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして

大伴家持

⑨ 新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け古事

「古今和歌集」(一九四頁〜一九五頁)

紀貫之

⑩ 人はいさ心も知らずふるさととは花ぞ昔の香ににほひける

藤原敏行

⑪ しら露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちちにそむらん

小野小町

⑫ 思ひつつ寝ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを

よみびとしらず

⑬ 飛鳥川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてん人は忘れじ

「新古今和歌集」(一九六頁〜一九七頁)

宮内卿

⑭ 花さそふ比良の山風吹きにけりこぎ行く舟の跡見ゆるまで

西行法師

⑮ 道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ

式子内親王

⑯ 桐の葉も踏み分けがたくなりけり必ず人を待つとなけれど

藤原定家

⑰ 駒とめて袖打ちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮れ

「東くだり」―「伊勢物語」から―(一九九頁〜二〇二頁)の本文

中に、次の二首が載る。

○ 唐衣きつつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

○ 名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人は在りやなしやと

〔平成二年度版 国語教科書〕

『国語1』

古典学習の意義について述べた「空のうた」(一八八頁〜一九一頁)

の中に、次の三首を収載する。

○ 不来方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五の心

○ いくたびか草の庵をうち出でて天つみ空をながめつるかも

さかゐのひとざね

良寛

- 大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

『国語2』

「短歌の世界 玉城徹」(八四頁〜九一頁)の「1」(八四頁〜八七

頁)の解説文中に、次の四首を収載する。

(新聞の投稿歌壇の入選歌)

- 雨の日のポストの口をわが拭ひ手紙を入れてあとすがすがし

防人の歌

- 父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜ忘れかねつる

北原白秋

- 草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

若山牧水

- 見てあれば一葉先づ落ちまた落ちぬ何おもふとや夕日の大樹

「2」(八八頁〜八九頁)に、以下の十首を収載する。

正岡子規

- ① くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

与謝野晶子

- ② ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲

石川啄木

- ③ やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

島本赤彦

- ④ 谷川の音のきこゆる山のうへに蕨を折りて子らと我が居り

斎藤茂吉

- ⑤ のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

五島美代子

- ⑥ ひたひ髪吹き分けられて朝風にもの言ひむせぶ子は稚なし

木俣修

- ⑦ 水の香のきよきこの夜瀬をのぼり瀬をくだる稚き鮎をしもふ

佐藤佐太郎

- ⑧ 暑き日の午後のちまたは風たえて塔のごとくに公孫樹たちたり

宮 柊二

- ⑨ 花のやうに日暮の鳥屋に眠りゐる鶏を姉とわれと見てゐつ

近藤芳美

- ⑩ 鉄を截る匂ひなまなまと立つ夕べ心疲れて運河に出でぬ

『国語3』

「さわらび——万葉・古今・新古今——」(一八四頁〜一九二頁)に、

以下の十五首を収載する。

「万葉集」(二八四頁〜一八七頁)

- ① 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額田王

柿本人麻呂

- ② 東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

山部赤人

③ 天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる

布士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の

影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も

い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける

語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は

反歌

④ 田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

山上憶良

⑤ 憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ

志貴皇子

⑥ 石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも

東歌

⑦ 信濃道は今の墾道刈り株に足踏ましなむ履着けわが背

大伴家持

⑧ わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

防人歌

⑨ 韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして

「古今和歌集」(一八八頁〜一八九頁)

紀貫之

⑩ 人はいさ心も知らずふるさと花ぞ昔の香ににほひける

凡河内躬恒

平成以降の中学校国語教科書における短歌教材について(3)

⑪ 風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬかげさへ底に見えつつ

小野小町

⑫ うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

「新古今和歌集」(一九〇頁〜一九二頁)

式子内親王

⑬ 山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水

西行法師

⑭ 道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ

藤原定家

⑮ 見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

三 光村図書の短歌教材掲載の傾向

他の四社の中学校国語教科書と同様、光村における短歌教材も、平成十四年度版まで現代短歌(近代短歌を含む)は短歌の鑑賞を含む解説文とセットで二年生に、古歌は古典として三年生に配当されている。光村を含む五社の教科書の全体的な考察は次稿に譲り、今回は光村の平成以降の短歌教材の掲載状況について概観しておく。前二稿と同様、短歌の収載状況を簡単な表で示すと以下の通りである。

	一年	二年	三年
現歌	(解3)(注2)	(解3)(注3)	(解6)(注5)
古歌	17	16	17
注1	三首の内訳は現代短歌が一首、古歌が二首である。		

注2 十二首を(12)と表記したのは本編でなく資料編に収載されていることによる。

注3 解説文中の三首のうち現代短歌は一首で、他の二首は古歌である。また、八首のうち現代短歌は五首で、他の三首は古歌である。

注4 解説文中の四首のうち現代短歌は三首で、残る一首は古歌である。

注5 (19)は『伊勢物語』の本文中に載る二首を加えた歌数である。

注6 注5に同じ。

なお、右表の算用数字は収載歌数を、(解3)は短歌の鑑賞を含む解説文中に短歌が三首取り上げられていることを意味している。また「現代短歌」は現代短歌の略で、「――」は短歌教材の収載がないことを意味している。

前稿では三省堂と教育出版、前々稿では東京書籍と学校図書を取り上げたので、それぞれ二社を比較する形で収載状況を見ていくことができたが、今回は一社だけなので、前稿・前々稿の結果を適宜援用しながら光村の短歌教材掲載の傾向を概観していくことにする。

他社の国語教科書においても一年生では短歌教材を扱わないのが一般的であるが、光村の平成二年度版は「六 古典との出会い」の単元の最初に「空のうた」と題する一文を掲出し、それぞれ時代の異なる三人(石川啄木、良寛、さかゐのひとさね)の空を詠んだ歌を紹介している。こうした導入の仕方は古典だけでなく短歌自体に親しみをもたせるという意味でも効果的だと思われるが、五年度版以降の教科書には取り上げられていない。

二年生の現代短歌については、十八年度版に大きな変化が認められる。それまで短歌の解説文と常にセットの形で取り上げられていた短歌が本文編には収載されず、資料編に「短歌十二首」として掲出されているのである。十四年度版に比して掲出歌数は四首増えてはいるものの、この

ような取り上げ方をしているのは光村だけで、十四年度版以降光村の短歌教材に対する扱いは他社に比べてかなり軽くなっているということが出来る。前の版との短歌の異同については、十八年度版(資料編)の十二首、十四年度版の八首はいずれも前の版とは全て異なる歌となっている。また、十四年度版の八首の中の三首は古歌となっており、九年度版の十首は前の版と全く同じ歌が、五年度版は一首だけ前の版と同じ歌が収載されている。

三年生の古歌については、収載歌数は十五首から十七首の間で推移しており大きな変動はない。歌数は四社の平均収載歌数よりやや多く、平成二年度版以降どの版も『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』の三大和歌集から歌集別に古歌を収載している。歌集別に見ると、他の四社と同様『万葉集』の歌が過半数以上を占めており、具体的には十四年度版が八首、その他の版は九首を収載している。前の版との歌の異同については、十八年度版は十七首のうち十二首、十四年度版は十六首のうち九首、九年度版は全十七首、五年度版は十七首のうち七首がそれぞれ前の版と同じ歌となっている。なお、五年度版と九年度版には『伊勢物語』から第九段の「東下り」を載せているので、同段の二首を含めると古歌は十九首ということになる。